

『うつほ物語』における「手」

——登場人物たちの筆跡からの一考察——

武藤那賀子

「キーワード」『うつほ物語』・手・仁寿殿の女御・春宮・あて宮・仲忠

はじめに

本論では、『うつほ物語』における「手」を取り上げる。『うつほ物語』では、「手」を、化粧・舞・相撲の勝負・碁・楽譜・音楽の奏法・筆跡といった意味で使用している。ここでは、その中で「筆跡」を取り上げる。「筆跡」の意味での「手」とは、それを書く人物の教養を表わし、またそれを書く人物の何たるかを表わす。そのため、「手」を見ることで、その文を誰が書いたのかを特定できる。これら「手」の特徴を、『うつほ物語』

『うつほ物語』において、「手」に関する記述は、物語の後半に偏っている。また、「手」についての言及がされるのは、登場人物の多いこの物語において、十名未満と少ないが、そこから人物関係が見えてくることもある。本論では、『うつほ物語』に出てくる「手」の用例を全て取り上げた上で、人物の「手」を通して、『うつほ物語』における人物同士のつながりについて考察する。

一．手紙の書き手を判断する材料としての「手」

「手」の最初の例は、「藤原の君」巻で、実忠が、あて宮の乳母子である兵衛の君を使いとして、あて宮に花びらに書いた手紙を渡そうとする一連の場面である。

「手」の最初の例は、「藤原の君」巻で、実忠が、あて宮の乳母子である兵衛の君を使いとして、あて宮に花びらに書いた手紙を渡そうとする一連の場面である。

兵衛、「さらば、賜はらむかし。例の、おほつかうこそあらめ」とて、取りて、御前にて書きつく。

ほのかには風の便りに見しかどもいづれの枝と知らずぞありける

と書きて、「かく言ひたらば」など聞こゆれば、「誰ぞ、君を、かく言ふらむは」などのたまふ。兵衛、持て出でて、「御覽ぜさせつれば、『兵衛がもとに賜へるなり』と聞こえつれば、のたまひまぎらはして、笑ひ給へれば、御前にて、これかれが聞こえつるなり」と聞こゆれば、「さればよ。」

君の御手にこそあめれ。」
(藤原の君 七三〜七四)

あて宮宛ではなく兵衛の君宛の手紙だとして、あて宮に相手にされなかつた兵衛の君は、実忠に「これかれが聞こえつるなり」と返事を渡すが、その筆跡を見た実忠は「さればよ。君の御手にこそあめれ」と兵衛の君の手だと判断している。

これと同様に、手紙の「手」を見て誰が書いたのかを判断する例は非常に多い。同じ「藤原の君」巻で、滋野真菅があて宮に求婚するべく、あて宮の兄、忠澄の乳母である長門に手紙を書かせる場面がある(藤原の君 九七〜九八)。長門は、孫のたてきに「殿の大君の御文」とあて宮の元へ手紙を持って行かせるが、その筆跡は「鬼の目を潰しかけたるやうなる手」であり、あて宮は、「長門が得たるにこそあめれ」との判断を下して手紙を返す。また、あて宮の返事を心待ちにしていた真菅は、長門の差し出した報告書を、あて宮からの返事だと勘違いしたまま開いてしまう。この時、真菅も「姫の手なり」と長門の手による手紙だと判断している(藤原の君 九八〜九九)。

しかし、長門の「手」のような劣悪な筆跡は他には出てこない。また、「手」によって手紙の差出人を判断する例も、物語の前半では「藤原の君」巻に出てくる三例のみである。逆に、物語の後半では、判断材料としての「手」、そして「手」に関する話題そのものも、その数を増す。以下に、これらの例を見ていく。

二、物語後半部における判断材料としての「手」の用例

手紙が「誰」によって書かれたのかを「手」によって判断する例は、先に挙げた「藤原の君」巻の三例以外では、物語の後半「蔵開・上」巻以降に出てくる。資料を整理する意味で、以下に全て挙げる。

① いぬ宮の五十日の祝宴(蔵開・上 五一〜五二)

御折敷見給へば、洲浜に、高き松の下に鶴二つ立てり。一つは箸、一つは匙食ひたり。松の下に、黄金の杓して、帝の御手して書かせ給へり。^{まじ}

② 俊蔭の手(蔵開・中 五三〜五四)

俊蔭のぬしの集、その手にて、古文に書けり。

③ 藤壺からの贈り物(蔵開・中 五四五〜五四六)

集まりて、興じて、皆取り据えて参るほどに、大いなる白銀の提子に、若菜の羹一鍋、蓋には、黒方を、大いなるかはらけのやうに作り窪めて、覆ひたり。取り所には、女の一人若菜摘みたる形を作りたり。それに、孫王の君の手し

で、かく書きたる、

「君がため春日の野辺の雪間分け今日の若菜を一人摘みつる

羹をば、かくなむ仕うまつりなりたる。聞こし召しつべしや」と書きつけて、小さき黄金の生瓢を奉り、雉の足、折り物に高く盛りて添へ奉り給へり。

④涼からの贈り物（蔵開・下 五八五）

源中納言殿より奉り給へる物ども、糸を藁にて、白き組をあららかにて、絹一匹を腹赤にて、それを五葉の作り枝につけつつ十枝、鯉・鯛は、生きて働くやうにて、同じ作り枝につけたり。雉の嘴には黒方、皆白銀どもなり。鳩は黄金、その嘴には黄金入れたり。小鳥には、黒方をまろがしたり。折櫃は白銀、沈の鯉、黒方の火焼きの鮑、海松・青海苔は糸、甘海苔に綿を染めて、下には綾、衝重二十六、蘇芳の物入れたり。洲浜を見給へば、中納言殿の御手にて、

行く水の澄む影君に添ふるまで汀の鶴は生ひも立たな

む

とあり。

⑤いぬ宮の百日の祝宴（蔵開・下 六〇五）

かくて、いぬ宮に餅参り給ふとて、女御の君折敷の洲浜を見給へば、例の、鶴二羽、しかよろひてあり。松、生ひたり。左大将の手にて書き給へり。

百日川今日と知らせつ乙子をぞ数へて千代となせよ姫

松

⑥兼雅の妻妾たちの筆跡（蔵開・下 六一三―六一四）

かかるほどに、花盛り興あるに、おとど、大将に、「一条の、人氣もなかなるを、『いかが住みなしたる』と、行きて見むいざ給べ」とて、もろともにおはして、まづ、北のおとどに入りて見給へば、居給ひし所に、かの君の御手にて、

妹背川すまずなりぬる宿ゆゑに涙をもなほ流しつるかな

⑦涼からの手紙（国譲・上 六四二）

かくて、その日暮れつ。つとめて、今日もよき日なれば、鍵の小唐櫃を開けて見給へば、白銀に塗物したる鍵ども、ふさにつけつつ、いと多かりける中に、見給へば、源中納言の御手にてあり。

君がためと思ひし宿のかきを見てあけ暮れ嘆く心をも
知れ

とあり。見つけ給ひて、北の方見給ひて、「うたてあり」と思ひて、隠し給ひつ。

⑧藤壺から源実忠への手紙（国譲・上 六四五）

蔵人、かの君の近く使ひ給ひし侍の人に、「これ、定かに参らせよ」となむ仰せられつる」とて取らすれば、「いみじう思し嘆くに、この文を御覽せば、少し思し慰めてむ」とて喜びて、物も聞こえで奉れば、「いづくよりぞ」。「知らず。『参らせよ』とぞ、人の申しつる」と申す。引き開けて見給ふ。かの御手なれば、見果てで、泣きに泣き給ふ。民部卿の、「藤壺なりな。賜へ。見給へむ」。いらへ、「ま

だ見給へずや、目も見え侍らねば。親と聞こゆるものは、おはしまさぬ世にも、御徳うれしきものなりけり。こちらの年ごろ、身をいたづらになして侍りつれど、音もし給はざりつるものを」とて、いみじう泣き給ふ……

⑨ 藤壺が第四皇子を出産した際の仲忠夫妻からの贈り物（国譲・中 六九三）

一の宮の御方より、子持ちの御前のおとの御膳、稚児の御衣・襷袢、いと清う調じて奉れり。白き折櫃に、黄ばみたる絵描きて、白き、黄ばみたる錢積みたり。御石の台に、例の、鶴あり。洲浜に、

行く末も思ひやらるる石にのみ千歳の鶴をあまた見つれば

と、大将の君の手にて書き給へり。

⑩ 仲忠からの贈り物（国譲・中 六九六）

岩の上に立てたる二つの鶴どもを取り放ちつつ見給へば、沈の鶴は、いと重くて、取る手しとどに濡る、……白銀のは、金なれど、殊に重くもあらず、腹に物の下に入れたり。書きつけたる歌は、黄金の泥して葦手なり。「これは、誰が手ぞ」と、集まりて見給へど、え知り給はず。御方、御覧じて、「大将の御手にこそあめれ。『若君に』とて、手本あめりし、同じ手なめり」

⑪ 石作寺での仲忠と宰相の上の遣り取り（楼の上・上 八三二）
取り入れさせて、見給へば、「大将の御手なめり。いと
いみじう恥づかしう。いかに見給ふらむ」とおぼえ給へど、

「仏の御しるしもあらむ」と、うれしう思す。白き色紙に、
「……」とも書き給へり。

思ひ当てに、かの見給ひし手よりは、いとなまめかしう
貴に書きたれど、「それなめり。げに、まがへる心かな」
と思す。

①⑤⑨は、それぞれ、いぬ宮の五十日の祝宴、いぬ宮の百日の祝宴、藤壺（あて宮）の若宮出産祝いの場面である。①は、折敷の洲浜にある作り物の松の下に黄金の牀に、いぬ宮の母方の祖父である朱雀帝の筆跡で和歌が書かれており、⑤は、折敷の洲浜に、いぬ宮の父方の祖父にあたる兼雅の筆跡で和歌が書かれて^{注4}いる。また、⑨では、仲忠が洲浜に和歌を書いている。

②は、朱雀帝の前で仲忠が俊蔭や俊蔭の父である式部大輔の集を開けた際の場面である。

③は、俊蔭や俊蔭の父母の遺文の講書の合間に、殿上で仲忠をはじめとした人々が語っていた折に、藤壺から贈り物が届いた場面である。凝った細工を施した鍋に、藤壺付の女房である孫王の君が和歌を書いている。

④は、涼とさま宮の間に生まれた子ども七日の産養のお祝いの品への返礼が、仲忠たちの元へ届けられた場面である。これとは別に涼からの手紙もあるのだが、そちらには「中納言の御手」などの記述はない。洲浜に書かれた和歌にのみ、この記述があることが注目されよう。

⑥は、顧みられなくなった兼雅の妻妾たちが一条殿を去った

後に、一条殿の様子を兼雅と仲忠が見に行った場面である。ここに挙げたのは、兼雅の妹の歌だけであるが、この後に、梅壺宰相の娘、千蔭の妹、仲頼の妹の歌が続く。かつての住居であるため、どこに誰がいたかということは兼雅には明白なことではあるが、書かれた和歌の手を見ることで、かつてそこにいた女性の存在感がより強まっている。

⑦は、殿移りをした涼とさま宮夫妻から送られた部屋の鍵などが入った小唐櫃を、後日、藤壺が開けた場面である。恋文と取れる和歌が涼の手で書かれており、それを偶然にも見つけてしまった藤壺は、「うたてあり」と思い、たまたま隣にいたさま宮に気づかれないように隠している。

⑧は、元あて宮求婚者の実忠の元に、藤壺から手紙が送られた場面である。藤壺は、「りやうの鈍色の薄らかなる一重に」「藤の花」を付けた手紙を、兵衛の君の兄で、今は春宮の蔵人になったこれはたをいとして届けさせた。その際に、「これ太政大臣殿に持て参りて、人々あまたものし給へらむ、源宰相に定かに奉れ」(六四四)と命じている。その命を受け、これはたは、実忠が「近く使ひ給ひし侍の人」に手紙を渡している。この構造は、差出人が、自身にとって信用のおける使いへと手紙を渡し、その使いが受取人にとって信用のおける使いへとさらに手紙を渡すという、読者の目線から見れば、差出人も受取人も明白な人物関係を構成している。しかし、実忠も侍も手紙がどこからのものかわかっていない。それでも、手紙の筆跡を見た実忠は、それが藤壺からのものであることを理解するの

である。

この場面で興味深いのは、手紙を見た実忠の「泣きに泣く」姿を見ただけで、実忠の兄である実正(民部卿)が、実忠の持つ手紙の差出人が藤壺であることを見抜くことである。また、実正が手紙を見せるように言った後に、実忠は「親と聞こゆるものは、おはしまさぬ世にも、御徳うれしきものなりけり。」と述べ、「いみじう泣」いたとある。実忠のこの様子を見て、春宮妃である妹の宮の君は、同じく春宮妃である藤壺の悪口を言い始める。その直後、春宮から宮の君に手紙が来る。以下に、その場面を挙げる。

春宮より、宮の進を使にて、御文あり。喜びて見給ひて、声を放ちて、「わが親の、今々とし給ひしまで、『我は、きんちを思ふにぞ、冥途も、え行くまじき。宮仕へに出だして、人数にもあらず、かかる折にだに、あはれとものたまはねば、おぼろけに、憎しと思すにあらざめり。かかるを見捨つること。いかさまに惑はむずらむ』と、泣く泣く隠れ給ひにし。あが君、今日の御文を見せ奉らずなりにし。かくぞのたまへる。天翔りても見給へ」と、泣きののしり給ふ。

(国譲・上 六四七〜六四八)

「親」を引き合いに出し、泣いている様子が、実忠が藤壺から手紙を受け取った際の様子に近いものがある。実正、実忠、宮の君の父である季明は、この場面よりひと月半からふた月は

ど前に亡くなったばかりであるため、両者の言葉に「親」が出てくるのかもしれないが、双方ともにあまりの嬉しさに激しく泣く様子は、全く同じである。

⑩は、第四皇子を出産した藤壺に、仲忠が贈り物をした場面である。仲忠は孫王の君と示し合わせて贈り物をしたため、孫王の君は、何も知らないふりをしている。そのため、女房たちは「誰が手ぞ」と疑問に思うが、誰にも分からない。ただ一人若宮の手本を頼んだ藤壺のみが、仲忠の手であると分かる。

⑪は、物忌のために石作寺に出かけた仲忠が兼雅の妻妾の一人であった宰相の上と、その子である小君に会う場面である。

宰相の上は、以前に仲忠の筆跡を目にしているため、手紙の差出人が誰かがすぐに分かった。対する仲忠は、「かの見給ひし手よりは、いとなまめかしう貴に書きたれど」と判断に困っているが、宰相の上であろうとの判断を下している。

以上のように、隔たった人物同士の間で手紙や物が遣り取りされる場合、そこに書かれた文字が誰の「手」であるかを見ることが、最重要事項となっている。これはごく当然の事象ではあるが、たとえば、⑦⑨のように、複数の人物から贈られた物に特定の人物からの和歌が書かれていた場合には、「誰」が書いたものなのかということが特に重要になってくるのではない。

判断材料としての「手」の資料を一通り見たところで、他の「手」についても見ていく。

三、「手」の美しさへの評価

「手」に関する記述は主に物語の後半に偏っていることは先に述べた通りだが、「手」の美しさを評価する記述は、物語の前半にあたる「内侍のかみ」巻に出てくる。

「仁寿殿は、うるせき人にこそありけれ。昔より後の世までの、いはゆる嵯峨の御時の女御ぞかし。今、それに殊に劣らぬ手など走り書きけり。など、正頼がもとに遣する文、これにおぼえたる筋の思ほえぬ」（内侍のかみ 三九〇）

源正頼と藤原兼雅が、各々が持つ手紙の優劣を競う場面である。^注正頼は嵯峨院の承香殿の女御からの手紙を、兼雅は正頼の娘である朱雀帝の仁寿殿の女御からの手紙を持ち寄って、どちらの持つ手紙がより素晴らしいかを競っている。この場面は、『うつほ物語』において、初めて「手」への批評が行われた場面でもある。結局、この勝負は引き分けとなってしまうのだが、このことから分かるのは、仁寿殿の女御の筆跡が、当代の一、二位を争うほどの筆跡であるということである。

仁寿殿の女御の筆跡については後に見ていくことにして、ここではその他の、「手」の美しさに言及した例を見ていく。物語の後半になって、ある人物が能筆の人物であったことが語られる場面が出てくる。「蔵開・上」巻では、「俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに」（五二七）と、俊蔭が能筆で

あつたことが書かれ、「蔵開・中」巻では、「歌・手、限りなし。」
「この母皇女は、昔名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり。」
（五四八）と、俊蔭の母の筆跡の素晴らしさが述べられる。「国
譲・下」巻では、「あはれ、源少将法師あらましかば、いかな
らまし。かたち・心めでたかりしはや。手を書き、歌をよく詠
みしぞや」（七九六）と、源仲頼が能書の人物であつたことが
書かれる。

しかし、「楼の上・上」「楼の上・下」両巻では、「手」を評
価する際の表現は、「をかし」「うつくし」という表現に変わる。

「これ見給へ。手をこそ、この気近く見し人々よりは、よ
く書きたれ。見所ある様に、をかしくぞ書きたるや。」

（楼の上・上 八三五）

これは、宰相の上からの返事を見た兼雅が、俊蔭の娘に対して
行なった言である。「内侍のかみ」巻で、正頼と手紙の優劣を
競った兼雅が、「この気近く見し人々よりは、よく書きたれ」
と言うほど、宰相の上の手は素晴らしいのだ。

宰相の上の手が評価された例を見たが、その子息である小君
の手も評価されている。

「……この君、仲忠らが教へむことも聞きつべし、手など
もいとうつくしう書き、声もいとをかしうぞ侍る」

（楼の上・上 八四六）

朱雀院と今上帝の要望により、仲忠が小君を連れて参内した場
面である。涼もいる場で、仲忠と女一の宮の第二子である宮の
君については「不用の者なり」と言っているが、兼雅と宰相の
上の子である小君については、右記のように評価している。
また、梨壺の皇子の「手」も評価されている。

「かの梨壺の宮は、いとなつかしううつくしげに、手も書
き給ひ、書も読み給ふなれば、春宮、教へ奉らば、いとよ
く、さやうにおはしぬべきを、……」（楼の上・下 八八八）

藤壺が父正頼と話している場面である。梨壺の皇子を引き合い
に出して、自身の皇子たちへの教育が行きとどいていないこと
をこの後に述べている。

これらの例は、各人物の「手」の評価を行なっているが、
その素晴らしさが語られるのは一回限りである。また、「内侍
のかみ」巻の例のような比較も行なわない。そのため、「手」
の素晴らしさを語られても、その程度が把握できない。そこで、
以下に、「手」の美しさが複数回語られ、なおかつ比較される
ものについて見ていく。

四. 仁寿殿の女御の「手」と藤壺の「手」

「内侍のかみ」巻で、初めて「手」が評価されたが、物語の
後半部、「蔵開・上」巻以降、評価される「手」は頻出する。

以下に、これらの例を見ていく。

左近の幄より鶴二つを出だして、その楽を、上下、揺すりてすれば、鳥も折れ返りて舞ふにはやされて、このおとど、

……かはらけを見給へば、女御の君の御手にて、

一よだに久してふなる葦鶴のまにまに見ゆる千歳何なり

と、例よりもめでたく書き給へり。大將、「いとめづらしく、今年二十年あまりといふに、この御手を見るかな。いみじうかしこくもなりにけるかな」と見給ふ。

(蔵開・上 四八九〜四九〇)

いぬ宮の七夜の産養の祝いで、人々が舞を舞っているさなか、仁寿殿の女御から手紙が来た場面である。ここでは、「女御の君の御手」とあるように文字を書いた人物が特定されるための判断材料としての「手」の役割は健在であるが、それとは別に、「いとめづらしく、今年二十年あまりといふに、この御手を見るかな。いみじうかしこくもなりにけるかな」との評価が下されている。二十年以上前に仁寿殿の女御と手紙の遣り取りをしていた兼雅だからこそその評価であるが、この手紙は当時以上に「いみじうかしこくもなりにける」とその上達ぶりが評されている。

仁寿殿の女御の妹にあたるあて宮の「手」も評価されている。

藤壺、見給ひて、「これこそ、わづらはしげなりけれ」などて、御返り、……白き薄様一重に、いとめでたく書き給へり。

三の宮、取り給ひて、「よの御手や。その御手をこそ、『よし』と、世人も思ひためれ。これ、はた、こよなかめり。かかる折ならでは、心と、え見ずなりにしはや。『人にのたまはず』と見ましかば、つらくもあらまし」。

(蔵開・上 四九三〜四九四)

いぬ宮誕生の祝いの品を送った藤壺に、仁寿殿の女御が返事をし、再びそれに対して藤壺が返事をした場面である。藤壺からの返事を見た三の宮が、藤壺の手を「よの御手や、その御手をこそ、『よし』と、世人も思ひためれ。」と評価している。ここでは、「世人」が藤壺の手を「よし」と思っており、評判になっていることが伺える。物語の前半において、藤壺の手紙の記述は数多くあったが、藤壺の手についての記述はここにきて初めて書かれるのである。

また、仁寿殿の女御と藤壺の手を比較する記述もある。

中納言まだものし給ふほどにあり。北の方の、女御の御文見給ふ、中納言も、「まだこそ見給へね」とて見給ふ。「これも、いとよき御手にこそ」。父おとど、「昔より名取り給へる上手にて、藤壺のものし給ふに劣らざるらむ」。中納言、「一日見給へしかば、これにまさりてこそ侍りしか」など

のたまふ。

(蔵開・上 五〇四)

いぬ宮の九日の産養の翌日、兼雅・俊蔭の娘夫婦とともに仲忠が三条邸に移った後に、仁寿殿の女御から手紙が届く。仲忠は初めて見る仁寿殿の女御の手を見て「これも、いとよき御手にこそ」と述べる。ここでも、二十年以上前から仁寿殿の女御と手紙を交わしていた兼雅が、仁寿殿の女御が「昔より名取り給へる上手」であることを述べ、「藤壺のものし給ふに劣らざるらむ」と述べている。しかし、仲忠は先日藤壺の手紙を見たことを伝えた上で、やはり藤壺の手は仁寿殿の女御の手に「まさりてこそ侍りしか」との判断を下している。

仲忠が知り得ない昔の女性たちの手を知っている兼雅は、「内侍のかみ」巻では、正頼と共に手紙と手の優劣論を繰り広げていたが、この場面では、仲忠が知っている藤壺の手を兼雅が知らないことが明かされる。兼雅は「藤原の君」「春日詣」「祭の使」「菊の宴」の各巻であて宮から返事をもらっているが、あて宮が藤壺となつてからは手紙の遣り取りはしていない。

「菊の宴」巻で兼雅があて宮から手紙の返事を貰つてからこの場面までは、四年間の隔たりがある。僅か四年前のあて宮の手を知っている兼雅が「藤壺のものし給ふに劣らざるらむ」と現在推量「らむ」を使用しているのはなぜか。これは、おそらく「藤壺」となった今、「あて宮」であつた頃の筆跡とは変わっている兼雅が考えているためであろうと考えることができる。

そして、あて宮であつた時も、藤壺になつてからも手紙の遣り

取りをしていた仲忠は、父とは違い、藤壺の筆跡を知っているため、仁寿殿の女御の筆跡と藤壺の筆跡を比較し、「これにまさりてこそ侍りしか」との判断を下すことができるのである。

また、仁寿殿の女御の「手」は他の人物とも比較される。

さて、御書仕うまつるほどに、宮はた、青き色紙に書いて、呉竹につけたる文を捧げて来て、「宮の御返り言」ともて騒ぎて、大將殿、「しばし、今」と言へば、上、「持て来や」とて取らせ給へば、大將殿、「いとかたはらいたく、苦し」と思ふめり。上、御覽すれば、……と、いとをかしげに書き給へり。「女御の君の御手の、貴に若くは見ゆれど、大人しくも後見おこするかな」と思ひて、押し巻きて、投げ遣はしつ。大將、賜はりて見て、「何ごとにか侍らむ」とて、懐に入れつ。

(蔵開・中 五三八―五三九)

朱雀帝の命で仲忠が俊蔭の遺文集の講読を行っているところに、女一の宮からの返事を持った宮はたが帰ってきた場面である。女一の宮の手紙を見た父朱雀帝は、「女御の君の御手の、貴に若くは見ゆれど、大人しくも後見おこするかな」と、仁寿殿の女御と女一の宮の「手」が似ていると感じる。

以上をまとめると、仁寿殿の女御と女一の宮の母子は「手」が似ており、仁寿殿の女御と藤壺の姉妹では、藤壺の「手」の方が勝っているということになる。

五、仲忠の手

藤原仲忠の「手」の初例は、「内侍のかみ」巻にある(三八四)。この場面では、仲忠が、あて宮とおぼしき人物と手紙を遣り取りしているところを源正頼に見られ、手紙を隠したという一連の話を正頼が大宮に話している。仲忠が持つ手紙に書かれた文字を、正頼は「こともなく走り書いた手」であつたと話しているのである。ここでは、「手」についての批評はない。しかし、次に挙げる場面以降、仲忠の「手」への評価は頻出するようになる。

宰相の中將、藤壺にまうで給ひて、ありし御物語し給ふ。
……宰相の君、「……昔の人の中に、『あはれ』と思ほすやありし。左衛門督なりけむかし。それにぞ、下臈なれど、返り言などし給ふなりし」。「それは、手のよかりしかば、『見む』とてこそ」。宰相、「今やは御覽ぜぬ。いとかしこくなりにて侍るめるを」。君、「さて見しかば、宮に聞こえたりしかば、かしこも返り言し給ひつ」。「文賜へ。見給へむ。論なう、私事侍りけむかし。……」

(蔵開・上 五二―五二三)

宰相の中將である祐澄と藤壺の兄妹の会話である。あて宮求婚時代、数多くの求婚者たちがあて宮に手紙を送ったが、その中であて宮は、身分が低いにも拘わらず仲忠には返事をしていた

と、祐澄は指摘している。それに対し、藤壺は「それは、手のよかりしかば、『見む』とてこそ」と、理由を述べている。祐澄は、「いとかしこくなりにて侍るめるを」と今の仲忠の手がさらに素晴らしいものになっているだろうことを言い、藤壺は、先日それを見た旨を伝えている。また、あて宮求婚時代から仲忠の手が素晴らしかったことが、ここで初めて明かされることも、注目に値しよう。

仲忠の「手」の素晴らしさがどの程度のものなのかを示す例を次に挙げる。

これこそ、被け物を持ちて思ふやう、「こればかり賜はむとにやあらむ」とて、つくづく見る。腰の方に、文結びつけられたり。……この文を、「いとうれし」と思ふ。「かくののしる御手持ちたる人もなきものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ。これ、一行にても、持ちたる人は、心憎くせしものを」と思ひて、隠しつ。

(蔵開・下 五八三―五八四)

承香殿の女御に仕えていた女童、これこそは、仲忠から受け取った被け物に文が結びつけられているのを見つけ、「いとうれし」と思う。続くこれこそ「かくののしる御手持ちたる人もなきものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ。これ、一行にても、持ちたる人は、心憎くせしものを」との思考から、仲忠の「手」が世間で評判になっていること、それを内

裏の人々が見たがっていること、仲忠の「手」を一行でも持っている人間はそれを大事にするものだということが分かる。

また、仲忠は、物語内で唯一、他人の「手」を真似る人物でもある。

大将、三条殿に、米一石と炭二荷奉り給ふ。また、同じ数に、米も炭も、御厩の草刈・馬人召して仰せて、小さき童二人、大きな童子請じ求めさせ給ひて、一条殿に、少将の妹に遣はす。……と書きて、ちうしのすくよかなるに包みて、「山より」と、少将の手にいとよく書き似せて、近く使ひ給ふ上童添へて、「粟出だしし所に教へ入れて、帰りまうで来ね」とて遣はしければ、至りて、「水尾より」とて入れたれば……

(蔵開・下 五九六―五九七)

仲忠が、兼雅の妻妾の一人である仲頼の妹に贈り物をした場面である。仲忠が仲頼の手を真似したのは、この後にある、仲頼の妹の所にいる御達の言に「『かの君の御もとの』と聞きて、行き集まりて、誓ひ呪ひぞせむ」とあることから、他の妻妾たちに気づかれて面倒なことにならないようにする必要があったからである。また、この際に「小さき童二人、大きな童子請じ求めさせ」たのは、仲頼からの使いに見せかけるためである。しかし、実際に手紙を託したのは、自身の側近くで使っており、信頼のおける上童である。手紙は信頼のおける上童に託し、その上童を手配した童たちに紛らわせたところに、仲忠の慎重さ

が覗われよう。

さらに、もう一例、おそらく仲忠のものであらうと思われる例がある。

かかるほどに、孫王の君、藤壺にある夕暮れに、側離れて黒き水桶の大きやかなる、四つつい重ねて、女どもさし入れて往ぬ。局の人々、「あやしき物かな。御前に、かかる物をさし入れて往ぬる」とて見れば、大きな葉椀を白き組して結びて、五つさし入れたたり。……葉椀の蓋に、なま姫の手にて、「……」とあるを、孫王の君、「誰にか。例の人のすさびにこそあめれ。久しく、かやうのことなかりつるを」と述べている。贈り物の形状や、孫王の君を使いによろんとしていること、孫王の君の反応、また、物語内で他人の手を真似るのが仲忠一人であることから、この贈り物は仲忠からのものであらうとの予想がつく。

以上を見ていくと、仲忠は「手」が素晴らしばかりでなく、他人の「手」をも真似てしまえる、他の登場人物が持たない能力を持った人物であることがわかる。

六、春宮・若宮の「手」

「手」を習う場面が多い人物として、春宮と若宮の例を見ていく。

かかるほどに、紫の色紙に書きて、桜の花につけたる文、宮より。御使、藏人。開けて見給へば、『ただ今のほどは、いかが』となむ。かくては、えあるまじかりけり。何せむ、まかでさせて。ねたうこそ。

吹く風に花はのどかに見ゆれども静心なきわが身何ぞも

『先々、いかでありけむ』とこそ」とあり。おとど、「この御手こそ、久しく見ね」と見て、「いとよくなりけり」とてさし入れ給へば、女御の君、「かしこけれど、この御手こそ、右の大將の御手におぼえ給へれ」。藤壺の、「ただ、その書きて奉られたる本をこそは、男手も女手も習ひ給ふめれ。『それ、昔のぞ』とて、今の召すめれど、まだ奉られざめりしかば、『それ驚かせ』などぞのたまはせし」。

(国譲・上 六三五)

叔父である季明の喪に服するために里邸に戻った藤壺の元へ、春宮から手紙が届いた場面である。正頼は、春宮の手を見て「この御手こそ、久しく見ね」「いとよくなりけり」と述べている。それに対し、藤壺は、春宮の手が仲忠の手に似ていると言う。

続けて、仲忠が書いた手本を基に春宮が字の練習をしたこと、その手本は古いため、新しい手本を所望しているが、未だに仲忠から献上されていないことを伝えている。

次に挙げるのは、この後日談である。

「心地こそ、頭白くなりたるやうなれ、かく大きになり給ひにたれば。御手習ひなどはし給ふや。何わざし給ひつる」と問ひ聞こえ給へば、若君、「何わざも、せさする人もなければ。かしこに、『書習はさむ』とのたまひしかば」。母君、「いとうれしきことかな。かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」など聞こえ給へば、大將、うち笑みて、「……さても、宮には、『いかで仕まつらむ』と思ひ給ふべきを、今は、いとう物遊ばしなどし給ひつべかめるを、さる仰せ言もなければ」と聞こえ給へば、「誰かは。ここには、知らで籠り侍れば、おほぞうなるやうなれば。ここに、かくて侍るほどに、いかで習はし奉らむ」。大將「いと易きことなり。御書を仕まつらむ。……」。藤壺、「手なども、まだ習ひ給はざめるを、本をこそ、まづものせさせ給はめ。まことや、宮にも、『書きて』と聞こえ給ひける、『のかし聞こえ奉れよ。使がらか、見む』とのたまひしを、賜はりて奉らばや」。(国譲・上 六四一―六四二)

この場面は、第三節の最後に挙げた例で、藤壺が父正頼に、自分が産んだ若宮がきちんとした教育を受けていないと語った証

掬ともいふべき場面でもある。「書」も「手」も習っていないという若宮たちに、仲忠が師となつて教えるように藤壺は要請する。そして、そのついでとばかりに、春宮も、仲忠の手本を欲していることを伝えている。

この話には、さらに後日談がある。

かかるほどに、「右大将殿より」とて、手本四卷、色々の色紙に書きて、花の枝につけて、孫王の君のもとに、御文してあり。「みづから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。これは、「若宮の御料に」とのたまはせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召し侍りしかばなむ、急ぎ参らす」と聞こえさせ給へ。さて、御私には、何の本か御要ある。ここには、世の例になむ」とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹につけたるは、真にて、春の詩。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩。赤き色紙に書きて、卯の花につけたるは、仮名。初めには、男にてもあらず、女にてもあらず、あめつちぞ。その次に、男手、放ち書きに書きて、同じ文字を、さまざまに変へてて書けり。

わがかきて春に伝ふる水茎もすみかはりてや見えむとすらむ

女手にて、

まだ知らぬ紅葉と惑ふうとふうし千鳥の跡もとまらざ

りけり

さし継ぎに、

飛ぶ鳥に跡あるものと知らすれば雲路は深くふみ通ひ

けむ

次に、片仮名、

いにしへも今行く先も道々に思ふ心あり忘るなよ君

輩手、

底清く澄むとも見えで行く水の袖にも目にも絶えずも

あるかな

と、いと大きに書きて、一卷にしたり。

(国譲・上 六五四〜六五五)

仲忠の手をつくした若宮のための手本に対し、藤壺は「よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな」と言う。書かれた和歌には、未だ冷めやらぬ藤壺への思いが見て取れるが、それでも、非常に手の込んだ手本である。これまでに、仲忠は藤壺に対し、様々な趣向を凝らした贈り物をしてきたが、この手本はそれら以上の贈り物と言える。この後、「国譲・中」巻において、仲忠が若宮たちに手紙と魚を贈ったところ、若宮からの返事があつたとの記述がある。その「手」を見た仲忠は、「いとかしこも書き給ひつるかな。ただ先つ頃こそ、手本召ししかば、奉れしか。いとう似させ給へり」(国譲・中 七二三)と述べる。それを受けて、彈正の宮は、若宮たちが手習いをしていたことを話す。

先掲した場面では、仲忠が若宮の手本だけではなく、春宮の手本も届けたことが書かれている。こうして、ますます春宮の手は仲忠の手に似てくることになる。

内裏より、また、大将殿の御文、宮の御もとに、「……」と聞こえ給へり。藤壺、見給ひて、「いとよく、宮の御手に似たりかし」とて、「さし比べて見るに、まさりには、えぞあるまじき。……」
(国譲・上 六六七)

藤壺を見舞った女一の宮へ、仲忠が内裏から手紙を送った場面である。仲忠の手を見た藤壺は、「いとよく、宮の御手に似たりかし」と言いはするが、両者の手を比べると、春宮が仲忠の手を超えることはないとも言っている。

おわりに

『うつほ物語』において、「筆跡」の意味での「手」の用例は、前半にはほとんどなく、後半になってから多出してくる傾向があることは述べた。また、前半後半関係なく、誰が書いた文字なのかを判断するための手掛かりとして「手」が働いていることも見てきた。「内侍のかみ」巻における正頼と兼雅の会話で、「手」の美しさが語られるようになり、その後、兼雅が「手」の美しさを評価する場面が何回か出てくるようになる。しかし、「蔵開・上」巻で、判定者としての兼雅の地位は、仲忠にとつて代わられる。

また、何人もの登場人物の「手」の美しさが評価されるが、それらはいずれも一回性のものであり、比較もほとんどされない。その一方で、仲忠、藤壺、仁寿殿の女御の三人の「手」の美しさは繰り返し述べられ、また、彼らの中での比較も行われる。さらに仲忠はその「手」の素晴らしさを買われ、春宮、若宮の手本を作るまでになる。このように見ていくと、藤壺、仁寿殿の女御といった源氏の「手」が素晴らしいとされていたものにも拘わらず、物語の最後には仲忠の「手」が最も素晴らしいものとして位置づけられていることが分かる。そして、その仲忠の「手」が春宮、若宮の手本となるということは、仲忠、ひいては俊蔭一族が王権に関わっていくことが、琴と同じく、「手」からも見えてくると言えるのではないだろうか。

＊『うつほ物語』本文は室城秀之『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう・一九九五）により、適宜傍線を付した。なお、巻名とページ数については括弧内に記した。

注

- 1 室城秀之『うつほ物語』の手紙文―特に、「蔵開」「国譲」の巻について（『古代文学論叢』一四、一九九七・七）
- 2 『うつほ物語』に出てくる全ての「手」の用例を表にすると、次のようになる。

3

この場面は、以下のように続く。

巻名	判断材料としての手	評価される手	その他
俊蔭	3		
藤原の君			
忠こそ			
春日詣			
嵯峨の院			
祭の使			
吹上・上			
吹上・下			
菊の宴			
あて宮			
内侍のかみ		1	1
沖つ白波			
蔵開・上	1	5	
蔵開・中	2	2	
蔵開・下	3	1	1
国譲・上	2	2	1
国譲・中	2	1	
国譲・下		1	
楼の上・上	1	1	
楼の上・下		2	

……とて、一の宮に奉り給へば、物ものたまはず。

4

これかれ、「いかでか」などのたまへば、

食ひ初むる今日や千代をも習ふらむ松の餅に心
移りて

と書き給へれば、女御の君、折敷ながら、中納言の
御もとにさし入れ給へば、取りて見るやうにて、

千歳経る松の餅は食ひつめり今は御笠の劣らで
もがな

と書き給ふを、彈正の宮、「見む」と聞こえ給へば、

「いとかしこき御手侍れば、え見給はず」とてさし
入れつ。

この部分は、『うつほ物語 全 改訂版』の注には『いとかしこき御手に侍れば』に同じ。女一の宮の筆跡を戯れて言ったものか」とあり、新編日本古典文学全集『うつほ物語②』（中野幸一、小学館・二〇〇一）の注には「女一の宮の筆跡を戯れにいったもの、と解す説に従った」とある。論者はこれらの注に従った。この「いとかしこき御手」は仲忠の戯れの上での発言であり、また「判断材料」にもなっていないため、今回の例からは省いた。

①では、この後に、大宮、仁寿殿の女御、女一の宮、仲忠、忠康（彈正の宮）、大輔の乳母が、紙に和歌を書いてこの黄金の牀に順々に貼っていく。一方、⑤では、この後、仁寿殿の女御、俊蔭の娘、女一の宮、仲忠が和歌

を詠んだことは書かれているが、①の例とは違い、それをどこかに書いたなどの記述はない。

5 正頼と兼雅の手紙優劣論については、別稿を考えている。仲忠が藤壺の手紙を見た例は「沖つ白波」巻にある。

宮の君の御もとより、一の宮に、かく聞こえ給へり。

……宮、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何」とならむ。見給へばや」と聞こえ給ふ。「あらずや」とて見せ給はず。手を擦る擦る聞こえ取りて見るに、心魂惑ひて、いとをかしと思ふこと昔に劣らず、思ひ入りて物も言はず。宮、「をかし」と思ほして、御返り聞こえ給ふ……

(沖つ白波 四五二)

また、藤壺からの手紙を見た後にそれに返事をする場面が「蔵開・上」巻にある。

かかるほどに、「藤壺より」とて、……御文あり。

……宮、開けさせ給ひて、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何」ことにか侍らむ。見侍らばや。」「人に、な見せそ」とあれば」とて見せ給はねば、「わが君は、思し隔てたるこそ」とて、手をさし入れて取りつ。見れば、かく書き給へり。……君、見給ひて、うち笑ひて、「久しく見給へざりつるほどに、かしこくも書き馴らせ給ひにけるかな。この御返りは、仲忠

聞こえむ。まだ、御手ふるひて、え書かせ給はじ。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほほ笑みつつ見るに、あはれに、昔思ひ出でられて悲しければ、ゆゆしくて置きつ。

さて、赤き薄様一重に、……と書きて、同じ一重に包みて、面白き紅葉につく。宮、「見ばや」とのたまへば、「さぞ、見給へまほしう侍る」とて出ださせつれば、召し寄せて、はた、え見給はず。

(蔵開・上 四八二～四八三)

7 この部分に関して、『うつほ物語 全 改訂版』の注には「仲忠は、手紙の上書きを仲頼からと見せかけて書いて、一条殿に残された、ほかの女性たちの目を配慮したのである。」とあり、また、新編日本古典文学全集『うつほ物語②』の注にも「手紙上書きを仲頼からと偽装して、他の妻妾たちに気づかれぬように配慮する」とある。この部分に関して、『うつほ物語 全 改訂版』の注には「童子」は、寺などに仕える剃髪得度前の少年。仲忠は、仲頼からの使と見せかけるために、童子を選んだのである。」とあり、また、新編日本古典文学全集『うつほ物語②』の注には「底本『ほうし』を改めた。寺などに働く剃髪得度前の少年。仲忠は、仲頼の使いに見せかけるため、わざわざ童子を選んだのである」とある。

(むとう・なが) 博士後期課程)